

- (4) Louis-Firmin Julien LAFERRIÈRE, *Cours de droit public et administratif*, Rennes, Joubert, 5^e éd., 1860, t. 1, pp. 33-36.
- (5) C.E., 2 juin 1851, *Daudignac*, D. 1951. J. 589.
- (6) C.E., 19 févr. 1909, *Abbé Olivier*, D. 1910. 3. 121.
- (7) 拙稿「憲法的公共性とフランス警察法における【公序】観念について(3)」『山形大学紀要(社会科学)』13巻2号、1983年、41頁以下。
- (8) Jean RIVERO, *Les libertés publiques*, Paris, P.U.F., t. 1, p. 189 は、「憲法院の判例は、……1875年
以来の伝統である、立法者の絶対主権に終止符を打ち、……1789年の伝統に戻った」と言う。
- (9) *Ibid.*, pp. 183, 184. そのような自由が憲法上保障されたものかどうかによって、命令による規制
が制限的か全面的かの違いがあるにすぎない。
- (10) 近代立憲主義における、法律による権利保障の意義を強調するものとして、樋口陽一『現代民主主義の憲法思想』、創文社、1977年、41頁以下参照。

(一橋大学法学部教授)

シェイクスピアの時代の「政治」観 The View on 'Politics' in the Age of Shakespeare

塚田 富治
Tsukada Tomiharu

わたしがここで問題にしたいのは「政治思想史研究の対象としてのシェイクスピアの時代の魅力と可能性」である。シェイクスピアの時代は、それまでのどの時代にも優って「政治」が人々の関心や思考を支配する時代であった。「政治」は人々が熱中して見物するペイジェントにおいて重要な主役の一人として登場した。たとえば1579年、青年王ジェームズをエディンバラに迎えるペイジェントにおいて、正装した徳高い貴婦人の姿をとった「政治」Policie は、「平和」Peax、「正義」Justice、「豊穡」Plentieと共に王を迎え、祝福の言葉を述べた、と伝えられる⁽¹⁾。他方で「政治」は当代の人気劇作家の手によって、観客の失笑や批判を引き出す格好的として舞台上で論じられもした。シェイクスピアは劇中の人物に「政治なんか大嫌いだ。政治家なんかになるよりは、過激派の坊主になる方がまだましだ。for policy I hate: I had as lief be a Brownist as a politician」⁽²⁾と語らせ、またキッドは「政治」を陰謀家が暗殺のために雇った者を口封じのために始末する策略として描く⁽³⁾。このように「政治」はときに人々の期待を浴び、またときに強い反感を誘いながら、あらゆる階層に属する多数の人々の前に現われたのである。

「政治」に対する関心は世俗の領域に限られることはなかった。いまだ社会の中で大きな影響力をもっていた教会人や神学者によって、宗教が「政治」の影響下に置かれるという危機感に支配された数多くの説教や論争書がこの時期に著わされた。たとえばカソリックの国教忌避者は「キリスト教信仰が政治に役立つ限りにおいてだけ認められる」⁽⁴⁾状態を厳しく批判し、また危機感の裏返しとしてプロテスタントの聖職者は、「政治」が女主人である宗教に仕える侍女であり、忠実な召使いであるべき⁽⁵⁾、と執拗に説いた。このようにプロテスタント、カソリックの区別なく

「政治」は多くの聖職者の心をとらえて離さなかったのである。

とりわけ「政治」の時代ともいえるこの時期を象徴するものは、「政治」という言葉をタイトルとした書物が数多く出版されていたことである。『政治の道徳的方法』*A Moral Methode of civile Policie* (1576)、『政治の城』*The Castle, or picture of Pollicy* (1580)、『政治学六巻』*Sixe Bookes of Politickes or Civil Doctrine* (1594)、『政治の鑑』*The Mirrour of Policie* (1599)、『政治の手口』*The Practice of Policy* (1604)、『政治の手引き』*The Schoole of Pollicie* (1605)などがその例である。外国語からの翻訳を数多く含むこれらの書物は、視点は様々に異なるとはいえ、「政治」そのものをテーマとしていた。その他にも統治論、統治者論、そしてコモンウェルス論の中で「政治」は中心的なテーマとして論じられるようになるのである。

以上のような例が示すようにシェイクスピアの時代はすぐれて「政治」の時代であった。著名な英文学研究者は、「政治」がエリザベスの時代のライト・モチーフである、とさえ断定しているのである。このように言われながらも、シェイクスピアの時代を対象とした政治思想史研究の中で、「政治」を分析の中心に置く作品は全く見ることができない。そもそもこの時代はその前後の時代、すなわちモアの時代、そしてピューリタン革命、ホップズ、ロックと続く時代に較べて、研究者の関心が向けられることが圧倒的に少ないのである。その主要な原因としては、この時代が政治思想史上の古典といわれる作品をほとんど生み出さず、また後の時代に大きな影響を及ぼすような政治的事件を見なかったことなどが挙げられよう。『ユートピア』や『レヴァイアサン』に匹敵するような作品をわれわれはこの時期に見つけることができない。先に示した「政治」についての数多くの作品も現在ではほとんど読まれることはないのである。

しかし大思想家中心、大作中心、また大政治的事件中心という余りにも長い間、政治思想史研究者をしばりつけてきた——現に今でもその傾向は圧倒的に強いが——偏見から離れてシェイクスピアの時代を見るならば、それは研究の対象として尽きることのない可能性とぞくぞくするような魅力をもった時代であることに気付くだろう。たとえばわれわれは、様々な階層に属する多くの人々の関心を集め、議論の対象となった「政治」とは、その時代に生きた人々にとっては何であったのだろうか、あるいは人々は「政治」をどのように見ていたのであろうか、というきわめて刺激的な問題を設定することができ、しかもペイジェントや演劇の脚本から「政治」そのものを対象とした作品に至るまで、その問題を解くための豊富すぎるほどの材料をもっているのである。

さてこの材料について、気付いたことをここで少し論ずることにしよう。政治思想の歴史の中での独創的なもの、あるいは新しいもの——たとえば「近代」を導くものといった——をではなく、普通の人々が「政治」をどのように見ていたかを明らかにしようとする試みにおいては、おそらくその没個性、非近代性、あるいは翻訳書ということから、これまでの政治思想史研究においてはほとんど正当な扱いをうけてこなかった上記の「政治」を直接の対象として論ずる作品は、まさにそうした理由によってシェイクスピアの時代の「政治」についての議論をありのままに知る上で貴重な資料となるであろう。

そしてこの時期の政治思想史研究の資料についてとりわけ注目してよいのは、「政治」について論じた諸外国の作品がこの時期に数多く翻訳、出版され、イギリスの人々に読まれたということである。すなわちシェイクスピアの時代には、徳に基づく統治を説く倫理的な性格の強い作品から、現実の状況への適応のための格率を教える現実主義的な作品に至るまで、多種多様な政治論が翻訳、出版されたのである。現代においても政治思想史上の古典的な作品として知られるリプシウ

スの『政治学六巻』、マキアヴェリの『戦略論』*The Arte of Warre* (1560-62)、や『フィレンツェ史』*The Florentine Historie* (1595)、ジャンティエの『良き統治の方法について』*A Discourse upon the Meanes of wel Governing* (1602)、そしてボダンの『国家論六巻』*The Six Bookes of a Commonweale* (1606)などは代表的な例にすぎない。現代ではほとんど顧みられなくなっているが、その他にも数多くの政治論が翻訳され、読者の「政治」に対する見方や議論の性格の形成に大きな影響力をもつことになるのである。さらにその英訳出版は1640年にまで待たねばならなかったとはいえ、マキアヴェリの『君主論』の熱心な読者がこの時代にすでに存在したことをつけ加えておかねばならない。

正確な統計はさておくとして、この時期のイギリスにおける「政治」についての議論は、ミスやペイコンなどの土着の思想家の作品よりもむしろ、翻訳書によって影響されていたと言っても言い過ぎではないであろう。そこにはヨーロッパの政治論の主要な潮流が流れこみ、いわば初期近代ヨーロッパ全体の政治論の縮図のような状態が出来上がっていたのである。イギリスにおいて人々の「政治」に対する関心を活発な議論にまで高めていった重大な要因は、こうした外国からの政治論の積極的な受容だったのである⁽⁶⁾。

かつてわたしは、自分の貧しい研究成果の言い訳として、わが国における第一次資料の決定的な入手困難を示唆して、「筆者の研究成果は、いわば貧しい家庭の主婦が台所にあるありあわせの材料で作上げた貧しい料理のようなものかもしれない」と書いたことがある。しかし16、17世紀のイギリスの文献についての初歩的な書誌学的知識をもっている人ならば、すぐにわたしの言い訳が単に資料調査、研究における怠惰、あるいは無知を糊塗しているにすぎないことを見破ったはずである。数年前のわたしの怠惰と無知を白日の下にさらすことになるが、現在この国には、ありあわせどころか、一生をかけても使いこなせないほどの新鮮な資料、つまり一次資料が存在し、しかもそれらは、ときにはほかの国におけるよりもきわめて容易に利用可能なのである。恥の上塗りとなることの恐れと企業秘密を守るという意図からこれ以上のことを書くのは控えておこう。ともあれわたしは以上で述べてきたような問題設定に従い、そして尽きることのない資料に悪戦苦闘しながら研究をつづけているところである。

註

- (1) *The Historie and Life of King James the Sext* (Edinburgh, 1835), p. 179.
- (2) Shakespeare, *Twelfth-Night* in *Shakespeare Complete Works*, ed. Craig, W. J., (Oxford, 1983), p. 312.
- (3) Kyd, Thomas, *The Spanish Tragedy*, ed. Edwards, Philip (London, 1965), p. 72.
- (4) Allen, William., *A True, Sincere and Modest Defence of English Catholiques* (Ingolstadt, 1584) in *English Recusant Literature* vol. 68. (London, 1971), p. 148.
- (5) Leven, Christopher, *Heaven and Earth, Religion and Policy, or The main difference betweene Religion and Policy* (London, 1608), p. 49.
- (6) 外国語からの翻訳、出版は政治論の分野に限られることはない。出版業界においてギリシア・ローマ古典の翻訳はすでに15世紀末からはじめられ、イギリスの文化の形成に多大な貢献をしていた。エリザベスの時代に入ってから、同時代のヨーロッパ各国の出版物の翻訳が飛躍的に増加していった。原書の国籍はフランス、ドイツ、イタリア、スペイン、ネザランド、ポーランドとヨーロッパ全体にまたがり、またジャンルは宗教、文学、作法、各国事情から様々の実用書に至るまで文化全般にわた

る幅広いものであった。このことは全体としてみるならばこの時代のイギリスが文化的にみてヨーロッパの後進国であったこと、少なくともそこに住む人々の自意識はそうであったことを物語るものであろう。
(一橋大学社会学部助教授)

『トレヴーの辞典』 Sur le Dictionnaire de Trévoux

佐野 泰雄
Sano Yasuo

社会科学古典資料センターに入って左を見ると、革装の二折版の古書が背表紙に金の文字を輝かせてガラスのケースに勢ぞろいしている。これらの書物はフランス18世紀の辞典類で、ペールBAYLEの『歴史批評辞典』全5巻(1734年版)、ディドロ／グランペールの『百科全書』本文全17巻(1751-1765年)、図版全11巻(1762-1772年)、補遺全4巻(1776-1777年)、索引全2巻(1780年)、『トレヴー Trévoux の辞典』全8巻(1771年版)を数え、やはりそこに配架されているデュヴェルジェ DUVERGIERの法令集(八折版、全60巻、索引2巻)を含めて、同センターに所蔵される資料の豊かさを窺わせる内容である。

フランスの古典期のテキストを読む場合、これらの辞典はいずれもそのコン・テキストを示し得る、ないしはプレ・テキストとしてそれに紛れ込んでいる可能性がある故に非常に役に立つことが多いのだが、テキストの一義的な意味の読解ということになると、これら三種の書物のうち言葉の辞書である色彩の最も濃い『トレヴーの辞典』の有用性が抜きんでている。

では同時代人から「われわれの国語が持つもっとも広範で完成されたもの⁽¹⁾」と言われた、この『トレヴーの辞典』(初版1704年二折版全3巻)はどのようにして生まれ、どのように時代と関わってきたのだろうか。

フランス語の辞典がそれまでのラテン語・俗語対訳難語解説集の域を脱して、今日われわれが使う意味での辞典の形を取り始めたのは16世紀のことである。16世紀といえばフランス・ルネッサンスの世紀であり、法律文書にフランス語の排他的使用を義務づけたヴィレ・コットレ Villers-Cotterêts 王令(1539年)にみられるように国語としてのフランス語が意識され始めた時代であるから、この時期にフランス語の辞典編纂法が新たな転換期を迎えたことはむしろ自然なことであった。ロベール・エチエンヌ Robert ESTIENNE が上記王令の布告と同年1539年に著した『仏羅辞典 Dictionnaire français-latin』、最初のフランス語辞典と言われる、ジャン・ニコ Jean NICOT の『フランス語宝典 Trésor de la langue française』(1606年)がこの時期を代表するものであろう。

続く17世紀はよく知られているように、フランス語の規範化が行なわれた時代である。その総括を行なうかのように世紀末に大辞書が三種現われる。リシュレ RICHELET の『フランス語辞典 Dictionnaire français』(1680年)、フルチエール FURETIÈRE の『総合辞典 Dictionnaire universel』(1690年)、『アカデミー・フランセーズの辞典 Dictionnaire de l'Académie française』(1694年)がそれである。競合するこれらの辞典はその内容を異にしている。まずリシュレのそ